

【書評・紹介】

M. M. プロコフイエフ・V. A. デリューギン・S. V. ゴルブノーフ 著
菊池俊彦・中村和之 監修 中川昌久 訳
『サハリンと千島の擦文文化の土器—サハリンと千島へのアイヌ民族の進出—』
(函館, 函館工業高等専門学校, 2012年2月, A5判, 147頁, 非売品)

中村和之

本書は、下記のロシア語の原著の日本語訳である。

M. M. Prokof'ev, V. A. Deryugin, S. V. Gorbunov
Keramika kul'tury satsumon i ee nakhodki na Sakhaline i Kuril'skikh ostrovakh, Yuzhno-Sakhalinsk, 1990.

原著は、22年も前に刊行された本であるが、サハリン島と千島列島で発見された擦文土器について、初めて紹介した業績である。本書の刊行によって初めて、擦文土器がサハリン島と千島列島で出土していることが確認された。

まず、本書の構成等を以下に紹介する。

表紙画像

監修者序文 菊池俊彦・中村和之

要旨

序文

第1章 本州北部と北海道の擦文文化の土器

第2章 サハリン南部の遺跡から木村信六によって収集されたサハリン州郷土博物館所蔵の未公開の擦文文化関係資料 (1931~1933年, 1935年)

第3章 サハリンと千島列島における擦文文化の土器の新出土品

結び

註

付録 1~付録 17

図版

解説 1 瀬川拓郎「サハリン・千島出土の擦文土器とトビニタイ土器」

資料解説 澤井 玄「サハリン国立大学所蔵クズネツォーヴォ I 遺跡の擦文土器」

解説 2 澤井 玄「千島列島出土の擦文土器」

解説 3 中村和之「13~15世紀のサハリンアイヌの状況」

本書の第1章では、日本の研究を基に、擦文土器の特徴を概観する。続く第2章では、サハリン州郷土博物館に収蔵される木村信六 (1903~1941年) が収集した6点の擦文土器片を紹介

介する。第3章では、1960年代末から1980年代にサハリン島と千島列島から見つかった擦文土器片が紹介されている。付録1は擦文文化の遺跡の放射性炭素による年代測定値の報告、付録2～17は土器片の鉱物学的分析の結果の報告である。

1990年の原著の刊行以降も、サハリン島や千島列島では擦文土器が見つまっている。その数は決して多くはないが、それらの資料を無視して、原著の翻訳だけを刊行することはできない。そこで本書では、この問題について、二人の擦文文化の研究者が解説を寄せている。瀬川拓郎がサハリン島の擦文土器について、澤井玄が千島列島の擦文土器についての解説を担当している。この解説によって、現在の擦文土器の研究状況の中に、本書の原著を位置づけることができた。また中村和之は、中国史料を用いて、文献史学の立場からアイヌのサハリンへ島の居住域を拡大していく経緯について論じている。

このほか菊池俊彦と中村和之による監修者序文は、サハリン島と千島列島の歴史学・考古学の研究史を概観している。特に、1954～1957年の発掘調査に基づいて1967年に刊行されたコーズィレヴァ『古代のサハリン』の研究史上の位置づけなど、ソ連邦の時代の研究について詳しく説明している。

以上のように本書は、原著の日本語訳であるのみならず、随所に一般の読者にも分かりやすく読んでいただけるような配慮がなされている。

なお本書は市販の予定はない。ご興味がおありの方は、下記の諸機関に寄贈しているのでそちらでご覧いただきたい。まず北海道大学、北海道教育大学、弘前大学、函館工業高等専門学校などの大学・高専の附属図書館、つぎに北海道立図書館や北海道の市立・町村の図書館15館、ならびに国立国会図書館と青森県立図書館、北海道開拓記念館や北海道埋蔵文化財センターなどの博物館・埋蔵文化財センター37施設、ならびに青森県立郷土館と大阪人権博物館、最後に北海道立アイヌ民族文化研究センター、北海道立アイヌ総合センター、札幌市アイヌ文化交流センター、アイヌ文化交流センター（東京都中央区八重洲）などのアイヌ民族関係の諸団体には寄贈済みである。

（なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校）